

今後の委託プロジェクト研究に係る北陸ブロック提案会概要（メモ）

1 日時：平成26年7月15日（火）13:15～16:45

2 場所：石川県文教会館401・402会議室（4F）

3 概要

（1）開会挨拶：波積研究開発官により開会挨拶（略）

（2）出席者紹介

司会者が以下の順で中央テーブル着席者紹介（敬称略）

- ・株式会社六星経営管理課 大上戸 裕
- ・株式会社六星営農管理課 西濱 誠
- ・JA花咲ふくい 坪田 清孝
- ・生活協同組合コープいしかわ 脇坂 喜文
- ・新潟県農業革新支援担当 岩津 雅和
- ・富山県農業革新支援専門員 西村 聡
- ・農林水産省産学官連携コーディネーター 羽藤 公一
- ・農林水産省農林水産技術会議事務局研究開発官室 波積研究開発官
- ・農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課 小笠原調査官
- ・農林水産省北陸農政局生産部 荻島部長
- ・農林水産省北陸農政局生産部 松本次長

（3）ブロック提案会の趣旨について

資料1に基づき小笠原調査官が説明（略）

（4）生産現場の研究開発に対するニーズについて

① 農林水産省の研究開発制度の概要について

資料2に基づき小笠原調査官が説明（略）

② 研究開発への意見・要望

（大上戸氏）

株式会社六星は、白山市の旧松任市エリアで約140haの水稲作を行っている。水稲作は10名ほどのメンバーで取り組んでおり、平均年齢は25歳未満であり、極めて若い。

現在、大変困っていることは過去の取組について、いわゆる「見える化」ができていない、感のようなものに頼っていることである。それを改善するためにデータを収集しているが、高温障害等は自分たちだけでは対応が難しい。

当社は手取川からの用水を使用している。その用水の支線全ての水温等を測定している方がいるため、今後、タイアップして研究することを考えているが、費用を全て負担するのは難しい。

（西濱氏）

当社で作られている水稲の品種はコシヒカリが一番多い、約70haである。コシヒカリは近年の気象の影響により、特に後半のものについては、品質を確保するのが難しい。昨期の分散のため、ニコマルも作っているが、経営の中でコシヒカリのニーズが一番あるため、それに応えなくてはならない。

技術的に問題になっているのは、高温障害である。夜間の掛け流しを行っているが、暖かい水を入れている状況である。

従って、高温対策やコシヒカリの栽培が難しい地域で、コシヒカりに代わる高収益を確保できる品種開発や技術を期待している。

(坪田氏)

国営土地改良事業で造成された坂井北部丘陵地区で園芸の推進に約4年間取り組んだ際に、機械化体系が確立している水田作と違い、園芸の機械化は進んでいないと感じた。

高齢化と担い手不足は園芸推進に大きなダメージとなる。その解決のために、国の補助事業を活用し、加工業務用野菜を導入することとした。当初は、大根、にんじん、キャベツ、タマネギ、カボチャの5品目に取り組んだが、売り先や市場単価の関係で大根とキャベツに特化し、加工業務用野菜の推進を行っている。

(脇坂氏)

能登地域の食材を使って商品開発をして地域を盛り上げたいという取組を行っているが、食材候補は水産物が多く、農産物は少ない。これは、生産量が少ないということもあるが、加工に適さないことも要因である。産地と消費者との循環をうまく回すには、生鮮食品と加工食品をセットにする必要がある。

今回のテーマのような技術開発が進み、生産量の安定、農家所得の向上、就農者の増加というよい循環に繋がることを期待したい。

6次産業化については、「六星」のようにうまくいっているケースもあるが、投資が必要であり、リスクが高い。生産規模が一定以上ないとスタートラインにも立てない。生産するだけではなく、地域を挙げて市場で売れているものの原料を作るという方向に持って行く必要がある。

今回の提案内容が、農家所得の向上に繋がり、我々が加工して販売できるようになればよいと思う。

(岩津氏)

大豆担当であるので、新潟県の大豆作の現状を紹介し、研究への要望を述べたい。

新潟県では大豆を水田農業経営における重要品目に位置づけ、収量・品質の向上による農業所得の確保、並びに需要に応える生産量の確保を図っているところである。

しかしながら、現状では、収量、品質が芳しくないという状況にある。収量については、平成25年度の新潟県の大豆の平年収量は155kg/10aであり、これは20年前とほとんど変わらず、低いレベルに留まっている。品質については、しわ粒の多発により、昨年、一昨年は1等、2等の上位等級がほとんどなく、ほとんどが特定加工となったという状況である。

新規需要米等の非食用米の取組拡大に加え、大豆作の収益性の低さや不安定さが要因となり、大豆の作付面積は年々減少する状況が続いている。

収量や品質の低下については、基本技術の取組が不十分な面もあるが、原因が不明なものや技術的に有効な対策がないものもある。

研究に対する要望としては、良質米生産と大豆作を両立させるような管理技術の開発に加え、コスト低減や気象変動に対応する技術、あるいは優良品種の開発といった

生産安定に寄与し、収益向上を図る研究に引き続き取り組んでいただきたい。

(西村氏)

いかに水田作に園芸を取り入れるかを大命題にして取り組んでいる。集落営農や法人化により経営規模の大規模化が進んでいる状況であるので、大規模経営体が園芸に取り組む余地がある。そうした大規模経営体が園芸を導入するには、価格がある程度安定しており、機械化や省力化が図られる必要がある。

水田作に園芸を導入するには、生産性の向上と省力化が車の両輪となる。排水対策など水田の汎用化に関する技術を農家に入れやすい形で開発していただくのも、研究開発の大きな要素となる。